

とらおん



2023年12月16日 NO.651

「御同朋の社会をめざす運動」東海教区委員会 広報部
〒460-0018 名古屋市中区門前町1番23号

東海教区教務所内

TEL 052-321-0028 FAX 052-332-4097

e-mail info@tokai-hongwanji.net

東海教区三重組 活動報告

三重組の寺院数は 29 か寺です。朝明組や員弁組などがいくつかの講に分かれているのに対して、三重組は「十三日講」一つにまとまっています。つまり「講」＝「組」というわけで、「十三日講」の法要は、三重組における最重要教化行事と位置付けられています。

三重組「十三日講」は、本願寺第 11 代頭如上人の時代、大坂石山本願寺が戦場となった「石山合戦」の犠牲者追弔会に端を発する講です。江戸時代に授与された頭如上人の御影（黒衣と色衣の 2 幅）を組内寺院持ち回りで本堂にお掛けし、3 月・5 月・10 月の 13 日に「十三日講」をお勤めしています。

去る 10 月 13 日（金）には、西坂部町の覚照寺様で法要が勤められました。新型コロナ対策として、密を避けるために、午前と午後とで出勤法中を分け、参詣者も地域別の入れ替え制としました。午前の法要は、ZOOM でも配信しました。

午後の法要では、即如前門様からいただいた御消息が拝読されます。過去には第 20 代広如上人、第 21 代明如上人からも御消息を賜りました（この 2 通は組長事務所で保管）。

三重組「十三日講」は、戦国時代から実に 400 年以上の長い歴史を刻んできた講です。先人たちが守り育んできたこの伝統を、これからも大切にしていきたいと思っています。その一助として、現在、「十三日講」の歴史や御消息のほんこく翻刻・現代語訳などを記した冊子を編集中です。組外で興味のある方は、三重組組長（西勝寺）まで。



御消息の拝読



頭如上人の御影



ZOOM による配信



Contents

三重組活動報告	P1
こころばなし	P2
声	P3
特集①	P4.5
特集②	P6
御伝鈔解説	P7
お坊さんの書棚	P8

『苦しみは苦しんで

終わらない世界』

梅山 英暁（員弁組常満寺）

阿弥陀さまは仏となる前、法蔵菩薩という菩薩の位のとときに、私たちには想像もできないようなご苦労を重ねてくださり、この私が仏になれる南無阿弥陀仏のおはたらきを完成していただきました。そのおはたらきあった者は、もうこの命がむなしく終わるということはありません。この命が終わったら間違いなくお浄土というお覚りの世界に生まれ、仏とならせていただくのです。ここだけ聞くと死んだ後の話だと思ってしまうのですが、これは死んだ後のすくいということではありません。

私の父方の祖母、武内キヌエは昭和40年1月に46歳で往生の素懐を遂げました。祖母は重い病気が発覚した時、「何で自分はこんな病気にかかったんだろうか。何一つとして人様から後ろ指を指されることのなかった私なのに、その人生航路の結末が脳腫瘍とは計算が合わない」と言って泣きじゃくっていたそうです。しかし、「自分の命はあと幾許もないのだ」と直感してからは、放射線治療を受けながら命がけの聞法・聴聞がスタートしました。

いよいよ来るべき時がやって来た…。そんな境地の中から、祖母がベッドの上で口述したのが次の詩です。

「人の世は、上見れば上で

下みれば下で 限りなし

吾れ 半身不随なれど

いまだ右手あり、耳あり、右足あり

吾れ 脳腫瘍なれど

いまだ味あり 色彩あり 音あり

声あり 言葉あり 匂いあり

それもやがて消えゆく身なれど

尚念仏あり み仏あり 大悲あり 浄土あり

吾れ 尚 仕合わせなりき」

「なぜ自分がこんな目に…」と恨みつらみの数々を言い続けながら生涯を送っても仕方がない状況でも、そのことを、仏法を我がこととして真剣に聞いていくためのご縁であったと受け取っていきました。そして、失ったものではなく、今まだあるもの、届いているものに目を向け、何より阿弥陀さまのお慈悲を喜んでいかれたのです。

誰もが、それぞれに辛い過去があり、これからもあるでしょう。その事実は変わりませんが、そのことの意味が変わるということもあります。辛い過去をただ悔やんで生きていくのか、そんな縁があったからこそ阿弥陀さまのおすくいを我がこととして聞いていけるようになったと喜んでいけるかは大きく違います。

このことを聞いたからと言って、私たちの苦しみ悲しみがずっと軽くなるかと言えば、そんなことはないでしょう。でも、あなたの苦しみ悲しみをそのままにしておかずという阿弥陀さまのお心をいただいていく中に、苦しみ、悲しみがなくなるわけではないけれども、その苦しみ悲しみが、ただの苦しみ悲しみでは終わらない世界が開かれていきます。そんな世界にあってほしいと、阿弥陀さまが、そして阿弥陀さまのおすくいによって仏となっていかれた方々が南無阿弥陀仏とこの私に届き、はたらいてくださっています。

そのような仏さまがたの願いを聞かせていただくことを大切に、共々にお念仏を称え、お聴聞に励む日々を送らせていただきます。



『托卵』

季節はこれから寒さの厳しい冬を迎えます。初夏に近隣の林の巣で生まれ巣立っていたウグイスの雛鳥にとっては、今年がはじめての冬となります。親鳥の寵愛を受けて育った雛鳥は無事に今年の冬を過ごすことができるでしょうか。

ところでウグイスの親鳥は自分の子どもだけでなく、ホトトギスという別種の鳥の子育てもすることもあるそうです。ホトトギスの親鳥が、ウグイスの巣に卵を托して、ウグイスに子育てを任せるので托卵と呼ばれています。



ウグイスの親鳥の子育ては一筋縄ではいきません。ホトトギスの雛鳥は体がひと回り大きく活発で、ウグイスの雛鳥が押し出されて巣から落とされてしまうこともあります。それでもウグイスの親鳥は、ホトトギスの雛鳥を自分の子どもとして、巣から追い出すことなく巣立つことができるようになるまで分け隔てなく餌を与え続けて、外敵に襲われないように見守るのだそうです。

親鳥の寵愛を受けて育った、ウグイスとホトトギスの雛鳥たちは、この冬を無事に過ごした暁には、立派な親鳥になっていくことでしょう。

『父の13回忌』

父の夢をみた。

父のことをあまり知らない友人に、父のことを語り、変な味の駄菓子を食べて目が覚めるという変な夢だ。

父は、だいたいテンションが高く、思い込みが激しく、キャラ強めの頑固でとびきり純粋な人だ。それゆえに、家族や周りの人達をよく困らせた。

友人が家に遊びに来た時も、相変わらず父は父のまま、例えば突然、父の中で大流行りだったストレッチを披露し身体の柔らかさをアピール、そして拍手をもらおうという、独特なコミュニケーションの取り方をした。

有難いことに、私の友人は皆、器の大きな人達ばかりだったので、父を面白がってくれて、親しんでくれた。今でも話題に上がるのだが、当時の私にとっては恥ずかしくてしかたがなかった。

一生懸命な若者を見つければ応援し、階段を降りるときは必ず歌いながら降りてくる。

毎朝、母に話を聞いてもらい、母が時々父に何かを提言する。

2人の話し声は、まだ朝がこない私の目覚ましがりになっていた。

もう12年になるのかと、布団の中で父の姿を思い出す。

思い通りにはならないと語り、もがいていた父の姿は、時間がたつにつれ、より濃く私の身に浮かび上がってくる。

父に反発ばかりしていたが、私も2人の子どもをもつ親となり、近頃は父の話を聞いてみたいと思うようになった。

夜明け前、今日が始まるまでの少しの間、ぽつんと空いた心の穴がぬくまっていく。

称 名

よいお香を使おう

心地よい香りのある暮らしを



いえいえ、よい香りのものがたくさんありますよ。たとえば...

こんな風に
ご門徒さんにおすすめしたり
お寺でもよい香りに満ちた
ご本堂でお迎えしたり...
ぜひご参考になさって下さい。

教西寺ではお香に関するワークショップを折に触れて行い、「よい香りっていいね」と子どもも大人も喜ばれています。又、普段お寺で使っていて、改めて、「お香って何?」「生活に取り入れるには...?」と思い、教えていただきに行ってきた。

4月18日は
お香の日

推古3年
(595年)

淡路島に香木が漂着した日～



よくご存知? 東大寺正倉院の宝物 香木



らん じゃ たい
「東大寺」の文字を含む
雅名。正式名称は
「黄熟香」。(お香のくさ)



安らぐ・居心地がよい
ということは
よい香りを普段から
使うとよい...!!

湿気と香りが結びつく
↓
殺菌効果
梅雨時期おすすめ。
焼香の 煙も。

塗香 ~ 登礼盤の作法にも。

歌手の石川さゆりさんは
ステージに上がる前、
塗香をつけるそう。
(『メレンゲの気持ち』にてご本人談)

浄

お釈迦さまが沈香を好まれ
もともとは
入滅・その後も
沈香が焚かれた

仏さまへのお供え～十供の 一ばんめ
焼香 ~ はじめは沈香のみ
鑑真和上が合香の術を日本に伝える
(薬・練香として) 混ぜる

薬

沈香
体内を温める。吐き気・痛み止め。
丁香
クローブ。殺菌・鎮痛
リラックス。胃腸を温める。

すべて海外から
自然のものが原料
木・木の实・樹脂など
植物性・動物性

白檀
夏は爽やか & 虫除け
熱さまし

桂皮
シナモン。血流をよくし
冷えの改善。

龍脳
防虫・防腐

平安貴族～追風用意
～薰衣香:くわいこう。源氏物語にも
(着物に香を焚きしめる)
虫を寄せつけない
建築材料・お風呂など
ヒノキ、クスノキ、クロモジ
タンスの樟脳

正倉院にお軸
書物
着物が残っているのは
お香のおかげ

供

本堂は1年中
沈香をおススメします。
お寺さまもご門徒の皆さま
お香の素晴らしさを改めて
知って、よい香りに包まれて
過ごしていただけたら...



竹内真由香さん (三清本店 ↑)

お寺でのイベント・ワークショップ、企画なども
何なりとご相談下さい。



山奈
芳香。健胃。

大茴香
八角。防腐。健胃

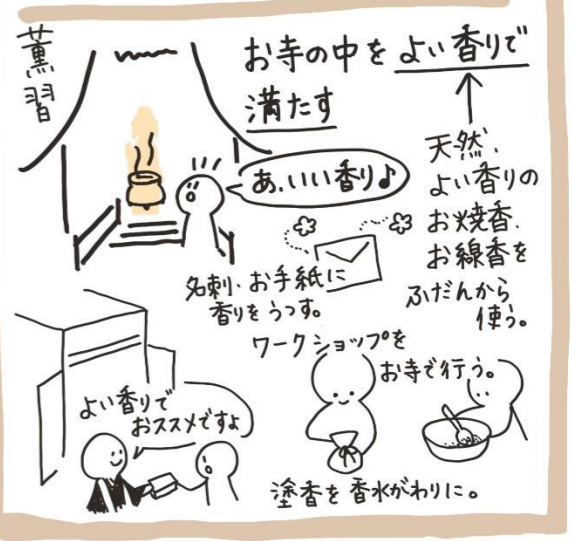
乳香
キリスト教の儀式でも
使われる。

龍涎香
マッコウクジラの結石。
比重が軽く海に浮かぶ
リラックス。単体では臭い
と感じる人が多い。

甘松
鎮静。健胃。

藿香
体を温める。
皮膚病にも。

お香～お寺でできること



～専修寺に行ってきました～

今年は親鸞聖人御誕生 850 年、来年が浄土真宗の立教開宗 800 年ということで、西本願寺だけでなく浄土真宗各派のご本山でもそのことを記念した法要をお勤するところがありました。三重県津市にある真宗高田派の専修寺でも 5 月に法要がお勤めされ、またこれに合わせて新しい宝物館『燈炬殿』が完成、開館しました。そこでこの度、『燈炬殿』観覧を含めた専修寺参拝をレポートいたします。

総合案内所での受付をして『燈炬殿』へと案内されます。入館すると二河白道をイメージした映像が投影された廊下を進み VR シアターへと向かいます。シアターでは 360 度の映像体験ができます。現在は「OJODO」と「SENJUJI360」の 2 種類のプログラムのどちらかが放映されており、この日は「OJODO」でした。極楽浄土の様子を感じさせるような美しい映像を見て、また壁に触れるとその映像や音が反応する様子を楽しむひと時を過ごしました。

その後は展示の観覧。それほど大きな展示室ではありませんが、企画の趣旨に合わせた展示をじっくり見ることができました。個人的には親鸞聖人が桑名で漁師に手渡したとされるお袈裟の裏に書かれた法語の展示があり大変興味深かったです。ちなみに館内のスタッフに尋ねると、親鸞聖人直筆の『三帖和讃』などは先般開催された三重県総合博物館の企画展のために貸し出され今も預けてあるとのことでした。戻ってきてからは『燈炬殿』でも展示されることもあるだろう、とその時を楽しみに待ちたいと思いました。

その後、専修寺の如来堂と御影堂へ行くと、ちょうどお昼のお勤めの時間にお参りすることができました。同じ真宗寺院ということで西本願寺との共通点や、お荘厳の違いなどもみることができました。今回、参拝にオペラグラスを持って行ったのがよかったです。『燈炬殿』の展示には歴史のあるものもあり、肉眼では文字が読みにくく感じる時があります。また、お堂の屋根下の精巧な彫刻や、堂内のお荘厳などもかなり見やすくなりました。専修寺の会館や門前で食事もとれますし、昔の趣きを残した門前町の散策も楽しめると思います。ゆっくり半日過ごしましたが、一日でも楽しめるように思います。

ちなみに、『燈炬殿』は常設展がありません。各企画展示が催される開館期間と展示替えなどのための閉館期間があります。開館期間も月曜日は休館日です。また、受け入れ人数に空きがあれば当日入館できますが、予約者が優先となっています。専修寺にお参りできる時はいつでも入館できるという訳ではないので、行こうかなと思った際は予約状況を確認したり自身の予約をすることをお勧めします。予約状況などは専修寺のホームページでも確認できます。



専修寺如来堂



OJODO の映像



専修寺 HP

第三幅 下巻第二段「^{いなだこうぼう}稲田興法

親鸞聖人は42歳の時、越後（新潟）から常陸の国（茨城）に移られ、稲田郷（笠間市稲田町）にてお念仏の教えを広められます。図の右側は親鸞聖人ら一行が栃木県の室の八嶋にさしかかった場面です。海のようにも見えますが橋が架かっており、海でなく池であることが窺えます。当時は八つの島がある大きな池で歌枕にもなる素晴らしい風景の場所です。

図の左側は、稲田の草庵です。萱葺き屋根の家で室内には親鸞聖人の御教化の姿が描かれています。老若男女、武士も僧俗共に描かれ、あらゆる人々にお念仏を広めている様子です。御伝鈔には、以前六角堂での救世観音菩薩の夢告がついに実現されたと示されます。



第十四図（本願寺名古屋別院蔵）

第三幅 下巻第三段「^{べんねんきいど}弁円濟度

これは御絵伝の中でも特にドラマチックな場面でお知りの方も多いと思います。図の右側には板敷山の山伏が二人描かれます。この辺りをよく親鸞聖人が通る道すがらでの待ち伏せの場面。山伏が弁円であるかどうかは定かではありません。この地域は修験道の山伏の行場です。現在も鬱蒼とした山中、森林の中に護摩壇の跡が残されています。

中ほどの左を向いて走る山伏が弁円で、稲田の草庵へ向かう姿です。図の左において門の入り口で普段着の親鸞聖人と弁円が対面され、室内でもう一度対面が描かれます。ここには弓矢、刀や杖を投げ捨て仏法に帰依する弁円が描かれます。この時、親鸞聖人が「明法坊」と名付けたと御伝鈔に示されます。



第十五図（本願寺名古屋別院蔵）

『親鸞聖人御消息』（註釈版聖典 743 頁）には常陸国の門徒からの手紙で明法坊の浄土往生を喜ばれ、「明法坊などの往生しておはしますも、もとは不可思議のひがごとをおもひなんどしたるころをもひるがえしなんどしてこそ候ひしか」と親鸞聖人が記されています。

過去に親鸞聖人に危害を加えようとしたが、その心をひるがえしたこの出来事を指しているとも思われます。親鸞聖人にとっても忘れ難い、大切な思い出であったことには違いありません。

この弁円の「回心」、ここを改めて私自身大切にしたいと思います。弁円は恐らく、祈願祈禱が全てだと懸命に励んでいました。しかし民衆はたちまち祈願祈禱ではなく本願念仏によって平等に救われる法を説く親鸞聖人の方へお尋ねになっていきました。自らの信仰が本気であればある程、親鸞聖人の存在が目付いたのでしょう。しかし、そのあなたこそが御本願の目当てであると聞き開かれ、往生を遂げられました。私が毎日袈裟衣を身に着け、念仏申し手を合わすようになった「回心」の根源を大切にしたいと思います。

桑名組教宗寺 藤野和成

※各寺院、時代や絵師等により御絵伝の描きぶりは多少異なります

『歌われなかった海賊へ』

逢坂冬馬/著 早川書房/出版

舞台はナチスドイツの敗色濃厚となった1944年、ドイツのとある町。

資産家の息子レオンハルト、武装親衛隊将校の娘エルフリーデ、父をナチスに処刑された少年ヴェルナー…様々なバックグラウンドを持った少年少女達は、愛国心を煽り画一した思想教育を行うナチス体制に反発し、「エーデルヴァイス海賊団」を組織し抵抗運動を始める。高邁な理念や統一されたイデオロギーを持つわけでもなく、「ナチスにこのまま従うことは出来ない」という、ゆるい連帯によって結びついた彼らはある日、町に敷設された不審な鉄道レールを辿った先でナチスの「究極の悪」を目撃し、その排除に乗り出す。だが、町の大人達はナチスに抵抗することを恐れ、コミュニティから逸脱することを恐れ、エーデルヴァイス海賊団と共に歌うことはしなかった。

本書は、歴史の中において歌われることのなかった人々がいたこと、今後も歌われることのない人々がいるであろうことを暗示している。昨今の世界情勢、国内に目を向けると悲惨な争いや分断、差別があらゆる所で続いている。果たして自分は正しい歌を正しいタイミングで歌うことが出来るのだろうか、歌われることのなかった人々の為に歌うことが出来るのだろうか、自問せずにはおれない。



※本欄で以前紹介のあった著者の前作、『同志少女よ、敵を撃て』もオススメです。

『あめつちのうた』

朝倉宏景/著 講談社/出版

—運動神経ゼロの雨宮大地は、高校卒業後、野球の聖地・甲子園で働くことに。グラウンド整備を請け負う職人集団「阪神園芸」の新人として憧れの地を踏むも、仕事は失敗続き。落ち込む大地だったが、夢に向かってものがく同世代の仲間たちと出会い、自分の弱さと向き合うことを決意し（裏表紙より）—

阪神タイガースファンのみなさま、リーグ優勝並びに日本一おめでとうございます。同書は言わずと知れたタイガース本拠地「甲子園」を舞台にした青春ドラマです。「阪神園芸」という会社の名前は聞いたことがある方もいらっしゃると思います。

「甲子園のグラウンド整備をしている企業さん」程度にしか認識していなかった私ですが、この本を通して仕事内容にも理解を深めることができました。この阪神園芸に勤める主人公「雨宮大地」が周囲の人々と関わりあう中で、それぞれが前へ一歩踏み出していく物語です。この「前へ」一歩を踏み出すことの難しさが描かれています。読後「自分もがんばろう」と思えるような本です。お勧めします。

